

## 明治天皇御幸(中川にてご休憩)

酒々井町第一の眺望を誇る、県立印旛手賀公園の山上、木内常右衛門邸旧跡を眼下にし“明治天皇御註ひつ記念碑”が建っている。碑の裏面に“御休憩四回、明治14年6月29日、7月1日、明治15年6月6日、同月8日、中川村木内常右衛門邸之築庭、昭和3年6月1日、鶴岡縫之助建設”の文字が刻まれている。この簡単な文字によって、この碑は何を語ろうとしているのだろうか。明治百年を機会に、この行幸記録を通じて、明治の時代を考えてみよう。

王政復古によって、日本国の絶対者として神格化されていた明治天皇が、三里塚下総種畜場への行幸の途中、中川村木内邸を御小休所に指定して、四回にわたり御休憩されたことは郷土にとって空前の盛時として迎えられた。このことは木内家の栄誉ばかりでなく、郷土の誇りとして広く語り伝えられたのであった。この行幸で御休所となった民家は五家であるが、いずれもその地方の豪家であって選ばれるに相応した家柄と格式をもっていたのである。木内家もこうした名家であり、三笠山を模した庭園のあることで、成田道中者の間に宣伝されていたのであった。

明治天皇御幸の御趣意は、畜産、農業の奨励のため下総種蓄場（農商務省農務局所轄）の「種蓄改良の景況並に泰西馬耕式」を天覧されるためであった。行幸の肯定は四泊五日、第一回は6月28日、午前8時、御乗馬で皇居御発、供奉するものは、東伏見宮、伏見宮両親王外、文武百官二百余名であり、その行列は構成において、服装、調度において明治文化の最高であって、天皇親政を象徴するものであった。行列は西小松川、伊豫新田の二箇所御小休みして、船橋駅（宿）御泊。29日は大和田・臼井、佐倉営所（連隊）中川で御小休み、成田駅新勝寺御泊。三十日三里塚及び附近数ヶ所で御野立天覧されて帰途につかれ、新勝寺御泊。7月1日往路と同コースで船橋駅御泊。2日、皇居環幸となっている。第二回も大体同様の行程であった。

この行程でわかるように東京から三里塚まで片道約七十軒を二泊途中休憩を重ねながらの旅行である。道路も当時はまだ狭くて曲りくねって急坂の多い道で、砂利などは敷いてなかった。雨が降れば交通途絶する箇所のできたという時代である。行幸の為に沿道が整備されたとしても、御馬車などでは無理な道路状況である。時代の違いがこの道路によってわかる。時代の違いは、道路ばかりでなく、思想の面でも断層の大きさが次の記録によっても見られる。

「聖上御動静通知供奉員、旅籠料、茶代、中川、江戸川渡舟料等細大漏らさず御用意あり、又沿道の赤子が鳳輦を迎えて歓喜の余り、献上物、催物をな

し、其の負担を増すのに苦痛を慮りて堅く之を禁ずる旨発令あり、是れ蓋し畏くも勸慮に出で給いし事なるべく、聖駕の過ぐるところ、君徳必ず民草をなびかす、其の仁慈は即ち君民同治の示頭とや申すべき」以下略（宮内庁保存記録）

#### 木内家御小休に関する酒々井尋常高等小学校報告

「前略—今該家並に故老の談によりて当時の状況を記す。中略—行幸の時恰も挿秧（田植）の時なりしかば、門前四畝歩計りの水田に於て農夫十七八人移植の業を行い其景況を天覧に供したるに、主上には御乗馬の歩を緩めさせ給い勸覧ましましぬ。此処より行くこと十二、三町上岩橋村に於ても同様天覧に供したり、想起す、当時主上は白馬金華山に召させ給い、御馬具の美麗にして威風堂々人目を惹くの外は供奉の将師と変らせ給わぬ御姿の様拝したり。拝観として四囲の里邑より群る男女老若路傍に立錫の余地なかりしも、其の行動至って自由にして、唯「手拭を被り居るな」の注意位に過ぎずして天顔を拝し得たるは今も尚当時の様を想う毎に有難涙せきあえざる感に打たるとか 以下略」

この酒々井小学校報告は昭和初年明治天皇聖跡調査に際して、校長椎名忠治先生の書かれたものである。

参考書 昭和5年千葉県教育会発行 「明治天皇御遺跡」

木内忠治郎氏所蔵

